

「AN ENCHANTED FOREST」 おとぎ話の森」報告書

外国語学部 英語英文学科3年 仁科 まりえ

はじめに

おとぎ話、といえは皆さん様々なお話をご存知のことかと思えます。赤ずきん、眠れる森の美女、ヘンゼルとグレーテルなど現在でも語り継がれている物語は数多く存在しています。しかしこうしたおとぎ話にお決まりのように登場してくる「森」について、深く考えてみた経験がある方は少ないのではないのでしょうか。森とは一体何を表わ



しているのか、どのような役割があるのか。そうしたことを探つていこうとする試みが、横浜キャンパス図書館にて開催された「AN ENCHANTED FOREST」おとぎ話の森 展覧会」とその関連イベントである「朗読＋ライブ＋トーク『赤ずきん』の森・ことば・おと」、「メルヘンの森——赤ずきん・狼・お菓子の家——」、「演劇パフォーマンス 赤ずきんの森」です。

AN ENCHANETD FOREST

おとぎ話の森 展覧会

2014年11月17日～2015年3月28日という日程で行われたこの展覧会では、「物語空間としての森」、「森の住人」、「森の生きもの」、「森の一軒家」という4つの章に分けて19世紀から現代までの様々なおとぎ話における森の絵・写真の展示が行われました。中世スペイン風甲冑、狼の毛皮など視覚的に大きなインパクトを与えてくれる物も展示されていて、おとぎ話の世界を体感で



きるようになっていきます。森という言葉から想像するものとはまた違う姿を見せてくれる作品もあり、現在に生きる私達に森という存在への新たな視点を示しています。

朗読＋ライブ＋トーク

「赤ずきん」の森・ことば・おと

12月13日、図書館の視聴覚ホールにて耳から赤ずきんの世界を体感しようという講演会が開催さ

れ、仏文学者の工藤庸子先生によるトークはおとぎ話の絵も見ていきながらフランスの民話からカナダの現代詩までを紹介するものでした。赤ずきんの4つのヴァージョンの朗読中には森をイメージした効果音や音楽もふんだんに使われ、読み聞かせや演劇とも違う独特の世界観が広がりました。また、最後には音楽家の方々による赤ずきんをモチーフとした幻想的な楽曲が披露され、聴覚から赤ずきんの世界を体感するという新鮮なイベントになりました。



メルヘンの森

—— 赤ずきん・狼・お菓子の家 ——

1月10日、横浜キャンパス3号館で行われた仏文学者・美術評論家の巖合國士先生による講演会は、教室が埋まるほどの人が集まり学外の方も多く見受けられました。おとぎ話をモチーフとした絵を美術的な観点で解説しながら講演が行われ、森とは異世界であり主人公の通過儀礼の場である、形を変えて広がり続ける森はそれ全体が

巨大な生命体である、日本では山が森と同様の役割を果たしているといった視点が、赤ずきんやヘンゼルとグレーテルなどの物語を通して語られました。また、赤ずきんの元となった民話、フランスのペロー、ドイツのグリムのそれぞれの赤ずきんのヴァージョンの移り変わりについて論じられました。

演劇パフォーマンス 赤ずきんの森

2月3日と4日の2日間に渡って学生劇団による演劇パフォーマンスが行われ、両日とも立ち見が出るほどの人が集まりました。フランス民話、ペロー、グリムという赤ずきんの3つのヴァージョンを合わせつつも新たな物語が展開され、よく知られているハッピーエンドとは違う、観終わった後に重い物が残るような結末となりました。また、赤ずきんと魔女が表裏一体であることが示唆されているのも特徴です。主人公が人ではないものとの出会う場所、通過儀礼の場である森が舞台であるからこそ描かれたのがこの物語であり、新解釈の赤ずきんが誕生しました。

おわりに

おとぎ話に頻繁に出てくる「森」へ焦点を当てたのが今回の「AN ENCHANTED FOREST」おと



ぎ話の森「展覧会」であり、その関連イベント3つによって森という存在をより深く理解できるようになっています。知識を得るだけではなく、森とは一体何なのかという疑問を各々で自分なりに考えることができる良い機会にもなったのではないのでしょうか。私達がよく知っているおとぎ話の裏にどんな意味があるのか、それを考えながら読んでいくと馴染みの物語もこれまで以上に楽しくなることでしょう。